

樹木希林さんとOne Team

校長 狩野博臣

(生徒会誌「菖蒲」巻頭言)

「これでいいんだと味をしめたわ」

子どもの頃、大の運動嫌いだった。クラスでの存在感も薄かった。小学六年生のとき、校内で水泳大会があり「歩き競走」に出場した。本来は泳ぎが得意ではない低学年向けの競技。出場者は一、二年生ばかりで六年生は自分だけ。体格も体力も違うためあつという間にゴールし優勝。同級生からはばかにされたが、賞品はクロールや平泳ぎの二、三位よりも輝いていた。

二〇一八年に七十五歳で亡くなった女優 樹木希林さんの逸話である。冒頭のことばは、当時のご本人の感想である。

出版不況が叫ばれる中、昨年、百五十万部を突破し平成最後のミリオンセラーとなった本がある。「一切なりゆき 樹木希林のことば」(文藝春秋)である。樹木さんが生前のインタビューなどで語ったことばがまとめられている。ある出版取次大手が発表した昨年の書籍年間ベストセラーで第一位となった。

「人生なんて自分の思い描いた通りにならなくて当たり前」

あくまでも他人との比較ではなく「自分」を生きてきた樹木さん七十三歳のときの境地である。ことばはこう続く。「いつも『人生、上出来だわ』と思い、うまく行かないときは『自分が未熟だったのよ』でおしまいにする。『こんなはずでは』と思うとき、他人の価値観や誰かと比較してそう思うだけじゃないのか考えた方がいい。本人が本当に好きなことができている、『ああ、幸せだな』と置いていけば、その人の人生はキラキラ輝いていますよ。」(「一切なりゆき 樹木希林のことば」から)

樹木さんが語られたことばは平明であるが、どこか人生を達観したような視点とユーモアがあり、深みと説得力を持っている。では、なぜここまで彼女のことばが多くの人々の心に響いたのだろうか。ダイバーシティ(多様性)社会と言われながら、異なる意見や考えには不寛容で、社会全体に閉塞感があり、どこか息苦しさを感ぜながら生活している人々にとって「我が意を得たり」という一冊になったのではないか。あるいは、自分ももっと樹木さんのように自然体で「私らしく」伸び伸びと生きてみたいという、根底にある願望の現れではないか、と思う。

話は変わるが、昨年末「二〇一九ユーキャン新語・流行語大賞」の年間大賞に、ラグビーW杯に出場した日本チームのスローガン“O n e T e a m”が輝いた。三十一人の選手中、十五人が海外出身の選手。例えば、日本のベスト8入りの立役者の一人、松島幸太郎選手。国籍は日本だが、父親はアフリカのジンバブエ人で六歳までは南アフリカで過ごしている。日本チームといっても両親の出身国、本人の国籍、出生地など、それぞれ背景が違う。その

三十一人がOne Teamとなって果敢に巨漢の相手にぶつかっていく姿に多くの方々が熱狂し、エールを送った。また、多くの人たちの心を動かしたもう一つの理由は、排他的な空気がただよう社会で、絆やつながりといった日本人が大切にしてきた価値観をラグーマンたちの雄姿に見たからではないだろうか。様々な背景や個性を持つ人たちが混在する社会になるであろう、これからの日本社会の縮図を見る思いで試合を観戦した方も多かったのではないだろうか。主将のリーチマイケル選手は戦前、こう語っている。

「外国人も日本人も一緒になって結果を出す。多様性がすごいチームと思ってほしい。これからの日本社会はどんどんグローバルになる。いろいろ感じてほしい。」

奇しくも令和という新しい時代の幕開けの年に、平成最後のベストセラーとなった樹木希林さんのことばとラグビー日本代表の活躍は、私たちが忘れかけていた大切なことを気づかせ、思い出させてくれた。

さて、「菖蒲」第四十号がここにめでたく発刊された。多様な個性を持ったもの同士が縁あって口加高校で出会い、時に個人で、また時にOne Teamとなって時間を共にした青春の日々の記録である。青春を生きる若者には汗まみれ、泥まみれ、涙まみれが似合い、それがカッコいい時代でもある。時に迷い、悩み、つまずき・・・胸の奥で暴れ出す竜を抑えきれないほどの若さとエネルギーである。その自己との格闘こそが将来、「私」という個性をキラリと光らせるための大事な人生のプロセスとなる。

結びに、「菖蒲」の発刊にあたり尽力してくれた生徒たち、先生方に心からの敬意と謝意を申し上げたい。

「人生は楽しむのではなく面白い。」(樹木希林)